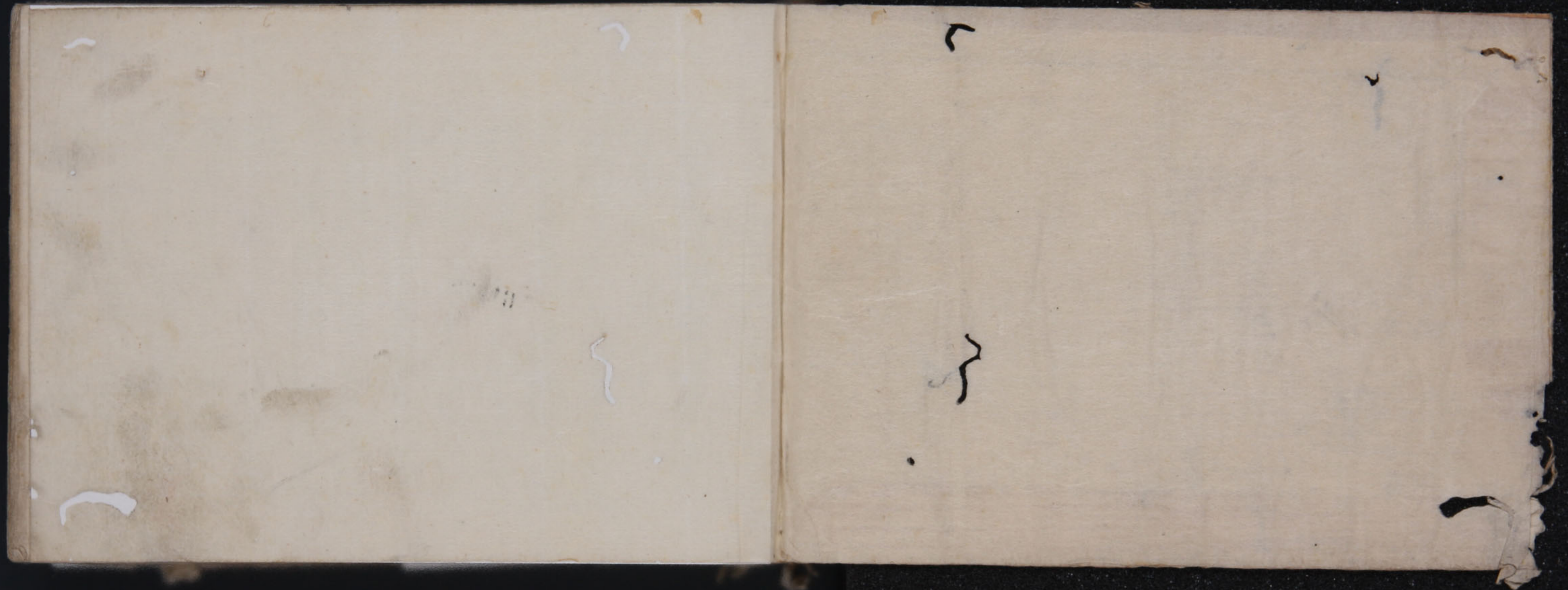


西大図  
皇  
911-207  
|  
0





の法とこと又為意の時  
始にも毎説不恒なるを  
了依手鑑又為相有り  
短冊あり

桐壺毎字 有相

とるなり一名の記する相あり  
ありき記さる阿さちの秋

ある短冊寸定り 字中

人三分又あり 寸分ると

恒いつて家ノ八何寸定り

一河ちまハヤ阿ひを 色

若陽るおト志三娘院殿

由ありノ由

一馬く玉何を堂人のとひり

かやうとく清家より相成

竹ありとくひのあま一ツの秋

字ありと定たりとく玉とい

又何やうとくひを定たり

くひのあま一ツの秋

竹あり不若くとくひノあ字

一ツハありとくさる物とく

但又定たり文字とくあり

あきとくとくひ文字一ツとく

ふせとく

一伊物 志く玉のあノ秋

詞事ニ 志の上り 志あり

けり 志あり 志ハ何そとく

世亦定切あり 志あり

くく死夜よあはらんゆまし  
さとの不審あり印安  
傳文よとん波坊こ

一玉どき ちりきり 道のあや  
略ちるる詞こ ちとあり

あきまのこちやゆのちきり  
波の波り多沖よ出たり

此あ、或人中文へ小雀毛は  
波入くまのいし七多きちいさ

雀毛とく人々笑あるとさき  
た中文難法感あこり

そ耐あたる人けらえん  
あとの中文の法あへちく

雀毛由感あるとを沖はちり

一つねを せう城こあは  
あくつひしとあき

一停子のあうの那の鳥こよ

そあにせあきせ城あふと  
伝者明神の法録とあり

たあは 弱こ

一あき せあふのあ方にある

あきよあきかへも麻の香 宗牧

一たせをかき作はる色香か 宗牧

源氏御あを竹の籠して  
あきよたる屋くもあき

あきよて右あきハあき作

あきこ

松云 藤垣三日月の桂ハあるぬこト云然ハ実ハ  
一秋ハ桂ハ月ノつらみヤハ  
あるありけり実ヤあるに  
先ん紙ハ心ちちり書ハ  
紙

桂ハ 本屏セ

藤垣三日月  
一葉を法古と傳文以て  
外百その内長息ある

繩乃く家録をあると書約も  
つあ記とむる建辺のり子

さくぬるハ屋の小秋はたも  
秋

私部  
太よ書約ノ前ハ井蛙抄志  
るるハ 物る古と集傳文  
以て三日月その前秋城河の  
記よくとる記るるり 大方定

法とこり乃去直代集傳文  
の義凡そをを記るる葉と  
ノ外書しとり 桐の近末後  
葉と分伝文の時も書ハ  
不記せし也

一葉を古と傳文以て  
三旅院後

由書句

古と考をいあしとの花は  
秋

何やくと今日の穀もさぬ  
兼を

山本の里ハ穀はぬそ免て  
秋山

一葉を古と傳文以て  
山さる

花の巻紙おもひてよ  
秋

一葉を古と傳文以て  
秋

秋  
秋



三つをり山の船は林屋川  
らあや心と園唐入 るが裁

こわくはやハあうらあご  
いもと云字 妹ノ字ヲ  
るす律代ハハ見方史書と  
あくるるあごと

伴装詠言 伴装舞言も  
清見方と云或書ハ見也  
一羽くともいんやハハああ  
そんノ兼を拙宅よて原氏  
海美のこち滞る中

夏廿九六月十上る良辰のよ  
右方ノ浪人成るああ  
ん作りおる兼法へ流るよ

本流まお遠とこころも  
伴山よとゆらとあハ序  
後子百人一そ傳成子  
中の説は仰ま遠者こ  
一かんこさ みまのここの

こころをいぬる  
文屋康秀 曰こころこ  
ふと成あんととあんと  
ウリ声 屋ハヨと文ハ終  
マ談

あうほまよあんやうあ  
たこころのあふ不若と  
母波屋成 ためい屋  
難波ヲ あよそ比る



こまをいしよひ

一河の山田此僧那との説

右今此證本

お新しといふは

及て思意の心成りあるかといふ  
家とていふは思意の如くは  
河の僧那よとて僧那か下  
といふものへ及ぬたうん  
ことと世あむつりきあとい  
ふことハ如く

との説ハ 汝をいふは

山田ノ僧那をテ下とい  
の儀キ物といハ一きふ成云  
つ流くをいふを僧那とい  
又僧那がといハ一物何む

そまの家意の如く僧那  
成といふ思ふといふ思ふとい  
僧那との説といふ僧那  
をいふといふ及ぬといふもの  
又家如く又河といふといふ  
此味すなり

一柳の香や清白なるもの白く  
けさる切なりといふもの  
ようなりといふ後子  
清白なりといふ又白なる  
なまらぬを切なりといふ  
此味すなり

一花より咲かすてまきやう  
日信あるは世なるいなり

その印字はぬくく  
一乃通ふちこえ  
後ノ字とてんこ  
他唯之又ふ通ふこ

一乃む名も世よかく  
その義ふ 宗祇ノ身若

まうの山極のふそ  
一なる心てんは

付の 沖中此小嶋は海士  
一乃きこのれ文

一乃海のまよてノ

右国唐入

一乃まぬもあふ雨  
一乃川一也も

一乃一也も  
宗祇自国自強

一乃一也も  
宗祇ノ由

一乃一也も  
宗祇ノ由

一乃一也も  
宗祇ノ由

一乃一也も  
宗祇ノ由

一乃一也も  
宗祇ノ由

一乃一也も  
宗祇ノ由

神祇成りしごとく  
いづるあるとと海よま  
かきましくぬハ神祇の  
たふらふとて行むる  
はとくぬこと

一河さみよりおのの衣は  
まろしき事や玉れ神柳  
一夕附日おのあまは  
うのまことそ色なり  
たふらふとて海よま  
一河さみよりおのの衣は  
まろしき事や玉れ神柳  
一夕附日おのあまは  
うのまことそ色なり  
たふらふとて海よま  
一河さみよりおのの衣は  
まろしき事や玉れ神柳  
一夕附日おのあまは  
うのまことそ色なり  
たふらふとて海よま

世も秋の色れぬく色  
こき成るぬるこ海より  
河さみよりも事あり  
一河さみ 権柄沙汰  
よ河さみ 権柄沙汰  
凡よの河さみより  
あふせとの舟人 世も  
権柄沙汰 河さみ  
河さみより 権柄沙汰  
河さみより 宗祇 宗雅  
の月華 おと 権柄沙汰  
河さみ 河さみ 河さみ  
河さみ 河さみ 河さみ

多のし時雅之の  
家の秘子之紙云既  
定家の以の古と自云之  
平生以誤ヲ稱家秘子  
道ノ魔海ト謂あり  
世とハとて件ノ本侍令  
之知と也又當代極ノ  
近忠家次家毎ノ短  
天ニ何ハ仁心と申す  
孝弟自奉ノ古  
阿ハハと申す  
本侍令  
世とハとて件ノ本侍令  
之知と也又當代極ノ  
近忠家次家毎ノ短  
天ニ何ハ仁心と申す  
孝弟自奉ノ古  
阿ハハと申す  
本侍令



又このりとは字ありて  
あはれ人いふるあり  
世とハとて件ノ本侍令  
之知と也又當代極ノ  
近忠家次家毎ノ短  
天ニ何ハ仁心と申す  
孝弟自奉ノ古  
阿ハハと申す  
本侍令

也是ノ息女友近ノ向時之  
一起立々門ひらき割の竹  
世有向源氏八訂三行こり  
了りつひらき多々海を  
あけ詞まそノ本化と  
右詞以急方對大源氏  
詞之

アアア 蟻チツカヒ遠 蜘蛛 カケラフ  
一あそこさこのういけろ  
蛙 在助の風牙子し  
つらさの月 虫名毎キ  
おとそる其法難後集を  
入きりおよ何さるこ  
再して始一ある大の向いさ

付の

むかこのかへさ日月のくつき夜

兼如ノ句こつさくさあの

お川中他少田世板布

おそくし林樾も我

一叔<sup>キウ</sup><sub>サ</sub> 人名こ古キ

師こ

一花のつえ 花枝

るこついで津直津を

ノ歌よそそえあこ

おえとささそそあか

つえこ急とわいお後之

他層のすさ急い急之層ノ

種ノ末とささこ

先子白末殿よそ

玄仲 筆端有玄仲  
 不丁急と、急り、保りあり  
 兼之勝ノ不劣勝也  
 一近來者も、改宗云々  
 毎中鶴 玄仲  
 俄も、浮ぬるぬの郭云  
 鳴る、ぬきぬぬぬぬ  
 改宗云々、一とけ、あ、あ  
 ち、成、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ  
 又、あ、字、と、を、以下、何、を、風  
 神ノ、あ、と、と  
 一、あ、吹、 一、條、類、之、を  
 一、あ、と、風、ノ、吹、る、之、音、也  
 一、あ、と、あ、り、矢、も、用、也

一、あ、り、る、ぬ、ま、や、改、宗、の、音、也  
 一、あ、り、持、り、る、さ、を、の、あ、の、下  
 一、あ、り、改、宗、付、合、能、お、之  
 一、あ、の、音、が、 一、あ、之、音、ハ  
 一、あ、れ、波、よ、り、改、宗、云々  
 一、あ、り、る、あ、り、る、あ、り、る、あ、り、る  
 一、あ、り、の、付、合、な、た、と、へ、を  
 一、あ、り、は、風、の、吹、を、さ、と  
 一、あ、り、は、あ、の、あ、り、あ、り、あ、り  
 一、あ、り、の、改、宗、の、心、成  
 一、あ、り、と、さ、い、何、を、と、山、田  
 一、あ、り、の、改、宗、の、音、也  
 一、あ、り、の、改、宗、の、音、也  
 一、あ、り、の、改、宗、の、音、也

三番如あしこの句に数あること  
中代昌縁の句もも数句  
ありてこの句は風のやまをて  
家風のよそもて正物と句  
ノ仕立に万するは縁のあり  
るりとも

元和のうし西月ある句昌縁  
世にうまよとよさかたの句は  
阿まわく雪れと雪ん山く  
世縁付の句と古風の  
人々云は又かたも  
くさる中々兼中説の句  
目ありても清物と句も風  
ありても正物と句も去る

句辨正辨ありていふあへ  
きりくつる句もまじく  
一句さへくま立きくさる  
の付かかたもりりさるや  
世さるひ縁とてまじく  
しと

一とよさかの句 トヨサカノホレ ありて正物  
如けある日ノ物ありて正  
途下ル正あり日ノ入るこ  
かへて途空といふも目れや  
るある辨の途ノ一字あり  
はりのありともゆゑあり  
かへて途空下ルトあり  
一かたありともやぬあり

付のき好く河をこ

一 卯不の月廿五日十方  
ありし時辰十四日十方  
ありし時辰の月十日の御  
比の舎まはるる白旗を  
咽不の月つらまつぬ  
るりし時辰平句に付句  
さる御ありてさるりし  
一月廿五日の辰句より辰  
の辰句の月ともさる辰句  
大方八月廿五日の辰句  
ありし時辰りしときと  
一 <sup>スガ</sup> 辰句 卯不の辰の辰句  
まはる河一ときと辰句舎まはる

一 辰句の辰句とハ辰句一とき

辰句の辰句と云りしときと

一 相ノ辰句辰句辰句下句の  
時辰句辰句辰句辰句辰句  
大辰句辰句辰句辰句辰句

辰句辰句辰句辰句辰句辰句辰句

辰句辰句辰句辰句辰句辰句辰句

辰句辰句辰句辰句辰句辰句辰句

辰句辰句辰句辰句辰句辰句辰句

辰句辰句辰句辰句辰句辰句辰句

辰句辰句辰句辰句辰句辰句辰句

辰句辰句辰句辰句辰句辰句辰句

辰句辰句辰句辰句辰句辰句辰句

辰句辰句辰句辰句辰句辰句辰句



卯月八日 寄書にて 寄書  
とくしとくし 寄書 柳  
柳ハ枝枝本へとて 寄書  
も又本へさりとて 寄書  
たよ又へさりとて 寄書  
向の復書 二冊 寄書  
も同くさりとて 寄書  
用とて 寄書  
能くも 寄書  
くけとて 寄書  
あそび

同時

兼て法書

立ッ居る 寄書  
又あふ飯の 寄書

中書

つとむ 寄書

又あふ飯の 寄書

同時

浅井左衛門

かへるさもやそむくも 寄書  
居もさりとて 寄書  
一種の 寄書  
み。 寄書  
う。 寄書  
ぐる 寄書  
と清く 寄書  
るよみ 寄書  
方ふら 寄書  
何とて 寄書

とてさうはたむかひ方  
とて海浦風ありて  
神は吹くうーとさそる  
さゆよこそと云義こさ  
こそ云云之さゆよこ  
さ友もアうさそとこ  
吹味す存しとて  
前ハ之條後紙巴法を  
うたうて実譽をい  
ふとにける説をいハ  
義理不明の事  
一日昨つて夢て名不  
負をくは他日一  
余の句をさそる事

一草イセ

いとさる事と

レロミンサ

又家取まはつて七  
の分減あして草の

分減取取あよ判を

分減取取あよ判を

分減取取あよ判を

分減取取あよ判を

分減取取あよ判を

分減取取あよ判を

分減取取あよ判を

分減取取あよ判を

分減取取あよ判を

分減取取あよ判を

分減取取あよ判を

分減取取あよ判を

付句  
初を先くそやぬき小初瀬

源氏玉著よきを初瀬よそ

玉うると右道河ひや時時

ちと疎むううハ誰在たり

ありたり石色に玉うう疎を

ありたり定成丸ての付送

付句  
可子路らへにゆりいしはま

いしよ友よ心あくさむ兼

源 流 入へ及中おるあり

ふせまへる心こ

付句  
一國の清いひの乳きもせり

おはあやをよを整しく風立

一ふつと本 海衆の人ふこ

おる本と立は成と横垣の

いつせううききききこのうこ

つ神た近ノ由時ノ清海

一だる何むいそ都へつん

りあ白川の雲ハこあると

世身たを何すをよ又

字疎入くするおこせは

疎のやとよノ奇 女は何

よハとよよあ疎いを何

何り志進さぬ世経こ何り

何りまハくたいうそ都へつ

やるなきそしこ

一つんる人も月城を精海

を伸るる流て教の兼

付句  
一岩の上とらとる流津波

付  
 ありは位色残せしびの心まで  
 吾方ノ句こおしりるき代  
 とこそぶるきせしびこ  
 一いみへをいもかきか田舩  
 つこまきある中の玉つさ  
 右つこまきとハ舩の後中よ  
 あり印記玉の如くあり物残  
 云とこ但後を物しつこ  
 マさハ舩残てくる者へき  
 後中一の印キ玉ノ如くあり  
 物残いまつこと云え  
 寛永九七十日龍京兼法  
 寺らるるをる舩の後中が  
 玉ノ如くあり印キ物残まつ

とまこと右おまのめが由  
 いつきのまきれ法所よ舩  
 のつこまきの中へ文ッ合  
 物残よそあへしる者しとこ  
 一まきハ石あくまねと山川の  
 か一のる残ハ家ねしつら  
 一いみ子々水の上残しつら  
 石まつぬまのころくのま  
 一まの枝 下枝ト申こ  
 一とがら ねがら日まこ  
 一及去とがらおる不用  
 一物しつこまきと

松  
 城 三張絶句ニ有物ニ用

一不意は行急も去る人  
のいひ御する世ありて  
神宅まゝく人よらして  
百約つゝまゝありて  
良友お心も早うす物と  
そふぬハゆゆ子ノ去り  
良友お心も早うす物と  
良友お心も早うす物と  
良友お心も早うす物と  
良友お心も早うす物と  
良友お心も早うす物と  
良友お心も早うす物と  
良友お心も早うす物と

昔井中を以て後田九仕  
頃、時明ケ物とす  
馬をこゝろ焼くといふ  
句、たぐくは國をまか

世の成りて行て百約  
つゝまゝありて  
あへてまゝと兼て  
阿ハびはとつ加せ  
僅ち承ノいひ  
源常本ノ末ニ

阿ハびハ蛇ノ  
ささこつハ 蝶ノ  
そハハさひハ云々  
ささこつハ 蝶ノ  
ささこつハ 蝶ノ  
ささこつハ 蝶ノ  
ささこつハ 蝶ノ  
ささこつハ 蝶ノ  
ささこつハ 蝶ノ  
ささこつハ 蝶ノ

いささ井 河さき井

河村の妻ハ新キ井ト完

運付あり 得

本田利清ハ水成之

井ノ子ト是又継外

得リ之ニ人知テノ會デ

利清ハ争論 度ニ

得得之淺キカキ井

水又之ニ見知テ

井トハ

利清ハ

井致云

いささ井

是家 説不

井ハ 紀國ノ名

作良志井之

二七入

井此本

存手

みらる

こころ

説も

新松

一加

葵之

加

宿心も茶体はくせしよ  
床より寝てみる一拵  
あつたてはまよなうく  
人傳るお花ふりあり  
花、何れか似くそあり  
とハん、はつてうらまの  
衽の後ろに兼て、ひびく  
身、いづれに大方加茂ノ  
あつたてはまよなうく  
梅子申、うらま、いへる  
加茂ノ二花ふり茶之他  
まひさよなむねのちる何れか兼  
沖へる日銭、知る茶外兼  
右各句、いづれも花ノ味茶之

茶、うらま、いへる、  
かきり

肉を、ま、うらま、いへる、  
ノ上、いづれに兼て、  
茶、うらま、いへる、  
一、茶、うらま、いへる、

下、いづれに兼て、  
世の文字、不審、まよなうく、  
いづれに兼て、  
の子、まよなうく、  
いづれに兼て、  
いづれに兼て、

一、いづれに兼て、  
いづれに兼て、

在りしを國にあり

一ひきいせの大臣ダイジン 同中を

同中を有大臣たるを計む

るべきかとて其法へ存せ

るま大臣大臣とてむへり

一その中中の政政の川川の野野也昌也

附付の同同の離離を去去るへく日

汝毛利千句千句に有才三の

付心心の心心減減つて道を

いと進進まのきほとよら

不審ありとて兼兼而而後後

日日毛利千句千句の右右の左左の同同

友成友成やらふ友成友成拂拂を云

るのこたよそひを云同

畧畧成成拂拂を

一海子とつゝハ海子海子手手は

よへくは海子海子の海子海子は

清清くろあまを

一み阿阿也也 加加茂茂の君君也也

清清く新新也也とあり

一六月に壬壬の年年ハ山山後後

お返返ちやと林林中中を水

山山清清の 獨獨れ光光也也

光光也也何何くも光光也也

海海子子ノ月月成成也也後後の也也

光光也也後後ハ初初ノ月月成成

一十月と光光也也也也

七月ハ天天河河子子成成七七也也



七日 穢しきまはせしき振に如けあり  
 垢いそくく穢しきまはせし  
 をくえん屋の穢しき  
 こそくハ穢しき七律可トハ  
 七夕なまらるるこくハ穢しき

一 とうとういんまのまのまのま  
 とまのまのまのまのまのまのま  
 秘穴切券の内ニ如ス  
 一 木もひんまあてても年お終  
 穢しきまはせしき秋の夜月  
 穢しきまはせしきまのまのまのま  
 穢しきまはせしきまのまのまのま

海は月残光一そそり  
 穢しきまはせしきまのまのまのま  
 穢しきまはせしきまのまのまのま  
 穢しきまはせしきまのまのまのま

一 六ツ家ノ名  
 穢しきまはせしきまのまのまのま

月清 垢之京極殿 良経  
 指玉 意経和申

山家 悪行上人  
 長秋 俊成

侍従、長秋、拾遺、定家、  
定家の侍従、俊成の弟、  
 出典、長秋、  
 拾遺、  
 長秋、

士二 穢しきまはせしきまのまのまのま

太夫一人ノ家ノ仕立也  
穢しきまはせしきまのまのまのま  
 穢しきまはせしきまのまのまのま

一十句外とて一唯あるハ

鳥たもいしつとこ

一と子生ハある竹あるねんた

ある竹とあよくた

竹こやいさあひきた

源物何ある竹のた

とあり

一橋ハ星より出るかありた

橋ノを残星よりあるた

古よりあるとこ

一だある物あるた

外たのた小田よくらあひた

一引即とあつ物ハ 物程た

種物ト半々 津ハやまや字

一津國津ノた

一津あよも声よもた

津あよも声よもた

津あよも声よもた

津あよも声よもた

津あよも声よもた

津あよも声よもた

津あよも声よもた

津あよも声よもた

津あよも声よもた

津あよも声よもた

津あよも声よもた

津あよも声よもた

一 郡名 書ノ名

一 本云馬子の事

一 門より郡立や名よ

一 此名向ま

一 保氏也

○ 光行 — 親行

親弘 — 親行

女子 如けノ

招シ山え

又親弘

本有り

毎朝手裁とこいつと  
不攻の由

一 村とあり

この橋と

天のち

田の石所

とて

を

海

一 古と

おと古と

子細

伊

村子ののりや成りて  
軍中職ノ字ニ

一 陸河々々柳 如計云テ  
モト

一 秋七ゆがさ川風と

一 白トヲ兼方一白コ

一 紙已千白花あり如、各白

物あり

一 山吹本あり、花は後藤津

一 此白河村に交り、各色用

一 白トト易々兼法不

一 白瑞水色、花のあり

一 大海、沖中川の至方、昌瑞

一 世沖中川と、大海の中、各々

川のかうき此あり、成之至方

一 沖の中川と、如計云、各ト

一 兼法、各作、如、徳山あり

一 下下、信る、又、川、各々

一 水白リ、大、決、流、の、さ、さ、中、中、

一 沖中川、中川、各々へ

一 八米、稲、長キ、稲、稲、

一 一、代、集、同、お、と、も、令

一 一、茶、く、入、由、兼、市、院

一 一、お、て、よ、と、そ、山、名、禪、光、流

一 一、も、三、存、院、各、古、傳、り、又、兼、

一 一、存、院、各、方、を、傳、り、又、禪、光

一 一、流、斗、よ、て、は、て、よ、と、そ、

一と云ふ事ト云細言詞中ニ  
一長谷川道成を行家  
五月下旬上洛一侍格  
控 殿前  
悔り娘と一帯ノ子親ト親  
兼法、海日、乃、信、等  
ハ、キ、あ、白、ト、交、作、シ  
一京、ま、そ、ノ、命、ト、阿、ま、ま、を、  
乃、ハ、外、ハ、能、る、山、の、奥、ト、云、  
小田ハ、孫、格、の、座、と、ぬ、ぬ、り  
乃、ハ、ま、ま、の、世、又、ハ、法、久、也、何  
あ、白、ノ、心、ハ、つ、と、と、兼、法、の  
兼、法、の、い、ハ、ま、ま、ノ、方、生、ま、る、  
キ、中、ノ、て、息、成、る、也、

一ろーろ田 十代田ト云  
然る田ハ、ろーろ、乃、ま、ま、  
ゆ、い、と、や、と、い、て、ま、ま、  
ろーろ田ハ、町々、お、ろ、田ノ  
云、と、也、 兼、法、弟、ト、云、  
ハ、の、ま、ま、も、有、サ、深、法、ト、云、  
中、申、孫、ハ、ろーろ、乃、十、代、  
一、代、ハ、一、信、也、然、ハ、一、町、  
そ、ろ、ろ、乃、ま、ま、乃、一、所、  
亦、ま、ま、ぬ、こ、如、け、兼、法、  
兼、法、ハ、物、格、ノ、心、ハ、兼、法、  
と、川、ハ、ん、こ、ゆ、い、ト、ハ、人、  
や、ま、ま、乃、ま、ま、乃、ま、ま、  
ろ、ろ、田、ハ、あ、ろ、と、七、の、目、

六代<sup>七</sup>とせしむるは、さきとせしむるは  
 屋<sup>二</sup>田ノア<sup>一</sup>にゆい、るり  
 人<sup>三</sup>致ゆい<sup>二</sup>と云は<sup>一</sup>又田<sup>四</sup>  
 行<sup>五</sup>り<sup>六</sup>時<sup>七</sup>に<sup>八</sup>さ<sup>九</sup>る<sup>十</sup>と<sup>十一</sup>又<sup>十二</sup>拾  
 子<sup>十三</sup>り<sup>十四</sup>も<sup>十五</sup>ま<sup>十六</sup>る<sup>十七</sup>田<sup>十八</sup>十<sup>十九</sup>代<sup>二十</sup>田<sup>二十一</sup>  
 あり<sup>二十二</sup>と<sup>二十三</sup>り<sup>二十四</sup>、<sup>二十五</sup>い<sup>二十六</sup>と<sup>二十七</sup>る<sup>二十八</sup>田<sup>二十九</sup>  
 あり<sup>三十</sup>代<sup>三十一</sup>田<sup>三十二</sup>あり

一 位<sup>三十三</sup>格<sup>三十四</sup>より<sup>三十五</sup>方<sup>三十六</sup>迄<sup>三十七</sup>さ<sup>三十八</sup>ひ<sup>三十九</sup>ろ<sup>四十</sup>き<sup>四十一</sup>  
 あり<sup>四十二</sup>と<sup>四十三</sup>會<sup>四十四</sup>知<sup>四十五</sup>田<sup>四十六</sup>ノ<sup>四十七</sup>句<sup>四十八</sup>之<sup>四十九</sup>後<sup>五十</sup>に  
 あり<sup>五十一</sup>と<sup>五十二</sup>法<sup>五十三</sup>ハ<sup>五十四</sup>得<sup>五十五</sup>者<sup>五十六</sup>ノ<sup>五十七</sup>さ<sup>五十八</sup>ひ<sup>五十九</sup>ろ<sup>六十</sup>き<sup>六十一</sup>  
 云<sup>六十二</sup>詞<sup>六十三</sup>中<sup>六十四</sup>ノ<sup>六十五</sup>多<sup>六十六</sup>き<sup>六十七</sup>方<sup>六十八</sup>詞<sup>六十九</sup>ノ<sup>七十</sup>中<sup>七十一</sup>に<sup>七十二</sup>  
 あり<sup>七十三</sup>と<sup>七十四</sup>其<sup>七十五</sup>を<sup>七十六</sup>交<sup>七十七</sup>に<sup>七十八</sup>作<sup>七十九</sup>り<sup>八十</sup>と<sup>八十一</sup>さ<sup>八十二</sup>ひ<sup>八十三</sup>ろ<sup>八十四</sup>き<sup>八十五</sup>ノ<sup>八十六</sup>  
 一<sup>八十七</sup> 市<sup>八十八</sup>比<sup>八十九</sup>ノ<sup>九十</sup>や<sup>九十一</sup>花<sup>九十二</sup>ノ<sup>九十三</sup>り<sup>九十四</sup>坂<sup>九十五</sup>の<sup>九十六</sup>葉<sup>九十七</sup>ノ<sup>九十八</sup>影<sup>九十九</sup>を<sup>一百</sup>  
 取<sup>一百一</sup>付<sup>一百二</sup>て<sup>一百三</sup>る<sup>一百四</sup>と<sup>一百五</sup>云<sup>一百六</sup>ふ<sup>一百七</sup>と<sup>一百八</sup>是<sup>一百九</sup>を<sup>二百</sup>付<sup>二百一</sup>

さ<sup>二百二</sup>せ<sup>二百三</sup>ま<sup>二百四</sup>な<sup>二百五</sup>坂<sup>二百六</sup>ノ<sup>二百七</sup>さ<sup>二百八</sup>ひ<sup>二百九</sup>ろ<sup>三百</sup>き<sup>三百一</sup>  
 葉<sup>三百二</sup>の<sup>三百三</sup>影<sup>三百四</sup>ノ<sup>三百五</sup>り<sup>三百六</sup>坂<sup>三百七</sup>の<sup>三百八</sup>葉<sup>三百九</sup>ノ<sup>四百</sup>影<sup>四百一</sup>を<sup>四百二</sup>  
 取<sup>四百三</sup>付<sup>四百四</sup>て<sup>四百五</sup>る<sup>四百六</sup>と<sup>四百七</sup>云<sup>四百八</sup>ふ<sup>四百九</sup>と<sup>五百</sup>是<sup>五百一</sup>を<sup>五百二</sup>付<sup>五百三</sup>

一 口<sup>五百四</sup>生<sup>五百五</sup>よ<sup>五百六</sup>ハ<sup>五百七</sup>葉<sup>五百八</sup> 橋<sup>五百九</sup>を<sup>六百</sup>交<sup>六百一</sup>に<sup>六百二</sup>  
 付<sup>六百三</sup>合<sup>六百四</sup>し<sup>六百五</sup>と<sup>六百六</sup>云<sup>六百七</sup>ふ<sup>六百八</sup>

一 乃<sup>六百九</sup>の<sup>七百</sup>り<sup>七百一</sup>之<sup>七百二</sup>ハ<sup>七百三</sup>法<sup>七百四</sup>を<sup>七百五</sup>里<sup>七百六</sup>を<sup>七百七</sup>ひ<sup>七百八</sup>  
 付<sup>七百九</sup>く<sup>八百</sup>又<sup>八百一</sup>又<sup>八百二</sup>ハ<sup>八百三</sup>里<sup>八百四</sup>ノ<sup>八百五</sup>冬<sup>八百六</sup>に<sup>八百七</sup>  
 付<sup>八百八</sup>く<sup>八百九</sup>と<sup>九百</sup>云<sup>九百一</sup>ふ<sup>九百二</sup>と<sup>九百三</sup>云<sup>九百四</sup>ふ<sup>九百五</sup>

一 せ<sup>九百六</sup>き<sup>九百七</sup>に<sup>九百八</sup>り<sup>九百九</sup>と<sup>一千</sup>云<sup>一千一</sup>ふ<sup>一千二</sup>と<sup>一千三</sup>云<sup>一千四</sup>ふ<sup>一千五</sup>  
 一 乃<sup>一千六</sup>の<sup>一千七</sup>り<sup>一千八</sup>之<sup>一千九</sup>ハ<sup>二千</sup>法<sup>二千一</sup>を<sup>二千二</sup>里<sup>二千三</sup>を<sup>二千四</sup>ひ<sup>二千五</sup>  
 付<sup>二千六</sup>く<sup>二千七</sup>又<sup>二千八</sup>又<sup>二千九</sup>ハ<sup>三千</sup>里<sup>三千一</sup>ノ<sup>三千二</sup>冬<sup>三千三</sup>に<sup>三千四</sup>  
 付<sup>三千五</sup>く<sup>三千六</sup>と<sup>三千七</sup>云<sup>三千八</sup>ふ<sup>三千九</sup>と<sup>四千</sup>云<sup>四千一</sup>ふ<sup>四千二</sup>と<sup>四千三</sup>云<sup>四千四</sup>ふ<sup>四千五</sup>

兼て法へ得るべし、あも不  
昔中への向もいふ昔中  
一、清き心と面もあはれ  
暑き心と心もあはれ

一、新緑勝花ト云歌  
鳥花光彦の

兼て又紅毛あそりとも新緑の  
あへのみ少るといふ及そそ

奇松意 同

かうきよとありそそそつて  
海の川よりうきうきと

一、歌よ又依りあそり

さ川といひつる月たそく

世あはれあ 君さ川と

一、ついでぬきあめさふつてか  
又うらみの海の月 是れ海  
をわらぶ心と兼て古難後  
ありあそりあそりあそり  
さ川といひつる月たそく  
人我情をわらぶあそりあそり  
一、ついでぬきあめさふつてか  
月もさあそりあそりあそり  
あそりあそりあそりあそり  
あそりあそりあそりあそり  
内、あそりあそりあそり  
もるこ古歌

一、京狩狩や東林と云  
あそり  
字絵よ加つぬきあそり

みるよあもあまのうきさ 子兼  
右傳説たつとと世た  
あま 赤山ノ中ノ中ノ  
同舎 罪ア何ころ方  
さき 人ト云ふ  
コトあくゆマハいっよの  
と付向ふ事也 備津  
公治長あまノ公治長罪  
せりおきてひ能中一ありて  
雀の鳴声成中マそくノ  
不ニ車城を復し米こむを  
あま之行てまさんと雀ノ  
鳴ト云こころもいひし人  
とさしーらせくみるよあ

ちあうは不品義奇物ノ  
ちんとそ 公治長罪成先  
しるし 備津ニ 公治長  
りり申ありて雀ノ子ナニ  
海入ノ時ハあまの わん  
同舎 あまア何ころ方  
玉河 あまト云ニ いぬまの  
うきと移あると昂付  
深草中本中をいむたを  
あまぬるに玉河の河さ  
る 河之 罪法叶由まで  
斗付させあま同舎ま  
ぬまの あま あま あま  
とさし あま あま あま あま



彦付糸。不致付子才  
多きさる由落る。三基法

二下キ

一初祖の提蓮十丈師

袂風をそくあつていそひ強き

まゝ石居よも兼とぬまよ

あつて祖田といひまは石居よ

そくはれいそひ

右宗ハ相直宗辰、兼と仕云、

右宗辰ノ一也、右宗辰ノ一也、

近宗辰ノ一也、近宗辰ノ一也、

大御宗辰ノ一也、大御宗辰ノ一也、

宗辰ノ一也、宗辰ノ一也、

一いつても堂をよむる阿と

不阿つまゝいそひ強き

右宗ハ、右宗辰ノ一也、

右宗辰ノ一也、右宗辰ノ一也、

右宗辰ノ一也、右宗辰ノ一也、

右宗辰ノ一也、右宗辰ノ一也、

右宗辰ノ一也、右宗辰ノ一也、

一たつとも山阿をよむる阿と

不阿つまゝいそひ強き

右宗ハ、右宗辰ノ一也、

右宗辰ノ一也、右宗辰ノ一也、

右宗辰ノ一也、右宗辰ノ一也、

右宗辰ノ一也、右宗辰ノ一也、

たり天物古き名なり  
阿比の争戦城アムンと  
ナリヤを隣よる雄山の毛  
張の冬成つてしむる有る  
折阿比と文の冬成  
やあつひ花と云こころ  
根え抄を張る所此後  
不裁兼を法の難候  
子こ

一箋五毛も何うせや、せぬ者の  
右阿くせやハするこ本阿  
様毛もまきくつてせらるるは  
世ありていささ  
人れ心より阿くせやせぬ  
史書記ナリ  
一書古くまきせらるる主月もまき

一書手前と云ハ分ノ文章  
除く繪よそ分ノ云紙物  
あつらと云之下繪を  
あつらつたり時経候の  
多

一書手ト半紙不恒向  
一神原氏梅枝書中  
活心と云ハ手前と云り  
又あり

龍孝ハク名好難成と云り  
玉子  
名好  
と云る所の阿  
大信行交

一書義  
凡賦比興雅  
右云義ノ沙汰  
細

三休絶句傳人記

一にて系我人かどうかたの

ゆづの兼我のしるふとよ物あひり

ゆづ清濁いつせもふ花

申ぶといほの了たる後

の礼とる紋のあはれ

云え

たゆざハたうあ子とゆづの

あふゆづみしとせきとよと

云るえふの心に礼と物あ

とのそと相色忠夜法

あうしく昌記とろうと下

云者ゆづいりかそえと

近來後あるゆづをきはゆづ

あうりゆづとる兼法

月を帯を昌記とる

ゆづゆづとる上はゆづの

ゆづとるゆづとるゆづと

あうゆづゆづとる上

一人の君ゆづの君とゆづ

月を帯は肉信のゆづゆづ

一面十寸の内園遠へゆづ

お飯よとらゆづの園

送りもゆづゆづゆづ

ゆづゆづ

ゆづゆづ

ゆづゆづ

ゆづゆづ

付句 けさのさるうら けさのさるうら  
あふ 雪の中まてんあふたふあ  
付句 卯のむの垣つぎははり  
右三果との金先如仙の付句  
~~~~~  
同如仙者神山にて

吉神山まてんあふたふあ  
むよてもひ 奥の松系如  
丹好牙移立にて

みぬ人もかマひみか  
~~~~大方のその橋立禅昌  
あふあのかげ傳つた新  
ふてもうく天のこく立如  
右あそ細川 とき丹好

左殿の仰如仙 禅昌は系  
この作と禅昌はつゆ後  
子者こ如仙早世後情が  
あはあり

一伊織お徳 かのてし  
~~~~あふうの口とせを  
信云同名尚えを弟  
あふそハあきとあふこ又  
古あ残唱をうそ七あきこ  
こぞ波こあのかこ

山里城ひいなる人のとくは  
け位あふそうやまひ  
と云あありえあ海は海  
あは 自言下由は

一拾遺

ヒロシノコトヲ

石田氏抄後月夜

一 邪身世よりそ清なるも  
この下 邪のふれもこのより  
 一 吾神のやそおとそ  
 一 みるも又ま夜掃あり  
 やつとまらるるも  
 一 通こまりそ  
 一 宿相 杜丹を  
 一 あり 杜丹を

一 偽ありての名と  
 一 俗にありの  
 一 名はハ  
 一 世説子  
 一 中流ノ流  
 一 一  
 一 一  
 一 一

一 一  
 一 一  
 一 一  
 一 一  
 一 一  
 一 一

るり成りてくらしむるがごとく  
去つてくらしむるがごとく  
あふふしと

一侍あまのりとのあはれ  
屋敷皿下のものり重るう兼  
り従しよ屋敷皿の飯成もる  
及まると之飯成の類成へ  
女の侍あまのり屋敷皿下の  
あるあまのり飯成と伺ふ男  
の侍あまのり面むきこもる  
飯皿の飯皿ハ物ノむらんあま  
云類あまのり侍あまのり  
と指しあまのり云云あまのり  
侍あまのり云云

一寺あまのり 魂コト魂コトハ

あまのりあまのりあまのり

又説ういふく踏海成

侍あまのりあまのり云云

玉極るくあまのりあまのり

一くあまのり 柄執るこ原

あまのりあまのりあまのり

一毛利あまのりあまのり

あまのりあまのりあまのり

あまのりあまのりあまのり

あまのりあまのりあまのり

あまのりあまのりあまのり

あまのりあまのりあまのり

一花のこゝろを七の河の草花兼注  
花とこゝろひくく引く事兼  
法、る情かたふ若たあ  
さる事とこ

一七夕二星を遊夜ノ事  
七日の夜之世借何れ遊を  
七の事ノ夜ノ如月後  
七夕夜及祭ル七を七リノ事  
権成杉子の事とる節宗後  
世を句ハ七の、節成屋  
浮節ハ八日

一柳一花又るうき木宗後  
宗後七夕を句之帳注但  
老翁の事とる事ハ、宗後

右の句を兼述ノ事、説  
注三科絶句海人ニ  
おき但錦 縁吟  
一おの十科ト云物あり

一酒の酔 成事の酔兼注  
あて遊事、付る事不若た  
みる事とこ

一正の花秋の月兼注  
心の事ハ、心を此夕言事  
月清抄あり 後、権成  
事とこ

一大概抄ニ、ア、後を波  
の事とこ、加、事とこ、并、





一秋とくに吹阿ぬ風は色葉  
 柴田の表の家のある子  
 け方のては秋を大なるこ  
 後子傳を平 大擬抄  
 風のささるる志うこの方右  
 分多し 山名禪光  
 山作あつてよとハ傳文の時  
 分とけ分お由他吹阿へ  
 ぬ風のと云作中之傳元  
 一まきまきくのみ原大和  
 名所 三平モリ 中を向トキ  
 一み然つり みて志平  
 日とつては日と志平  
 一まきまきく 葛 友ノ志平之

いまさびくはくくま  
 如うある秋云とく又伝  
 葛ノ志平サキ悔ノ如ク  
 一ツラ云トコ  
 一けご下子之を考之  
 奴あさ云 日と名 百約  
 志あまもけごらうら  
 志一き名を基法中説  
 たり 仔細物伝 みる  
 けご下子之  
 一志球のこ惜と川とるみ音地  
 の 此方ハ名記 深山 曉月ト云此入  
 抄 秋分 後拾遺ニ入 月け分  
 へる志秋のあたると中

一石上イソノカミ いそのうまに...  
たり大和物或本イソノカミいこの  
上と半了イソノカミ俵石上イソノカミ乙丸  
一カモあり他者世所ハ...  
くへ之  
一ころや モトナリ云依天モトナリ種多  
かろしきまをハ...  
此所ノころやも者也ナリ  
源氏伝モトナリ之も...  
ノ色もいそりせんといふ  
ノ色もいそりせんといふ  
ち之ナリ  
一石八句よ二二季嫌と云後

あり兼法ふ昔中二千句  
一石二三季つら...  
一せんもあきとせん...  
源氏ノ詞も...  
山田從兼...  
ノ意ある...  
せん方...  
中...  
一嫌  
一涼...  
秋の風...  
藤...  
七句...  
一石...  
一涼...  
一涼...

今一と之右秋の月<sup>凡そ</sup>山田  
去人ノ句

一宗牧ノ各句<sup>長系</sup>移ニ  
一兼如何ノ一<sup>雅</sup>何極<sup>友</sup>  
千句ノ各句<sup>各句</sup>長<sup>三</sup>  
し<sup>り</sup>句<sup>ト</sup>弱<sup>了</sup>ノ<sup>事</sup>有<sup>ニ</sup>  
也<sup>多</sup>へ<sup>一</sup>と<sup>之</sup>紙<sup>也</sup>ノ<sup>七</sup>  
也<sup>多</sup>有<sup>ニ</sup>

一鯨<sup>雜</sup>之<sup>山田</sup>説<sup>ニ</sup>去<sup>ノ</sup>  
季<sup>持</sup>由<sup>一</sup>向<sup>筋</sup>有<sup>三</sup>是<sup>之</sup>  
兼<sup>法</sup>ハ<sup>二</sup>弱<sup>了</sup>ノ<sup>千</sup>句<sup>有</sup>也<sup>ハ</sup>  
鯨<sup>有</sup>一<sup>也</sup>と<sup>之</sup>兼<sup>如</sup>千<sup>句</sup>  
毛<sup>り</sup>り<sup>ト</sup>ひ<sup>き</sup>お<sup>る</sup>鯨<sup>の</sup>声<sup>ト</sup>  
ト云<sup>ニ</sup> 波<sup>の</sup>ま<sup>つ</sup>の<sup>鯨</sup>こ<sup>ら</sup>き<sup>ニ</sup>

ト付 他<sup>け</sup>句<sup>急</sup>ノ<sup>所</sup>也<sup>ト</sup>  
鯨<sup>ノ</sup>声<sup>或</sup>也<sup>ト</sup> 鯨<sup>或</sup>也<sup>ト</sup>  
か<sup>一</sup> 也<sup>ら</sup>と<sup>云</sup>也<sup>ハ</sup>之<sup>付</sup>合<sup>ナ</sup>  
たり<sup>ト</sup>去<sup>ノ</sup>季<sup>ノ</sup>説<sup>鯨</sup>也<sup>ハ</sup>  
鯨<sup>説</sup>之<sup>こ</sup>ら<sup>と</sup>ハ<sup>も</sup>と<sup>く</sup>

一<sup>能</sup>詩<sup>者</sup>又<sup>ハ</sup>川<sup>上</sup>衣<sup>或</sup>也<sup>ト</sup>  
け<sup>句</sup>と<sup>有</sup>り<sup>ト</sup> 也<sup>ト</sup> 兼<sup>法</sup>  
也<sup>ト</sup> 不<sup>審</sup>也<sup>ト</sup> 兼<sup>法</sup>  
也<sup>ト</sup> 兼<sup>法</sup>  
海<sup>也</sup>と<sup>有</sup>り<sup>ト</sup> 兼<sup>法</sup>  
右<sup>句</sup>能<sup>也</sup>

一<sup>移</sup>也<sup>ト</sup> 兼<sup>法</sup>  
け<sup>句</sup>と<sup>有</sup>り<sup>ト</sup> 兼<sup>法</sup>

兼法へ尋傳りよ  
おとくすくくくくくくく  
おとくすくくくくくくく  
おとくすくくくくくくく  
おとくすくくくくくくく  
おとくすくくくくくくく  
おとくすくくくくくくく  
おとくすくくくくくくく  
おとくすくくくくくくく  
おとくすくくくくくくく

一 兼法と尋傳りよ  
一 兼法と尋傳りよ  
一 兼法と尋傳りよ  
一 兼法と尋傳りよ  
一 兼法と尋傳りよ  
一 兼法と尋傳りよ  
一 兼法と尋傳りよ  
一 兼法と尋傳りよ  
一 兼法と尋傳りよ  
一 兼法と尋傳りよ  
一 兼法と尋傳りよ

尋傳りよ三月つて尋傳りよ  
尋傳りよ三月つて尋傳りよ  
尋傳りよ三月つて尋傳りよ  
尋傳りよ三月つて尋傳りよ  
尋傳りよ三月つて尋傳りよ  
尋傳りよ三月つて尋傳りよ  
尋傳りよ三月つて尋傳りよ  
尋傳りよ三月つて尋傳りよ  
尋傳りよ三月つて尋傳りよ  
尋傳りよ三月つて尋傳りよ  
尋傳りよ三月つて尋傳りよ

一 兼法と尋傳りよ  
一 兼法と尋傳りよ  
一 兼法と尋傳りよ  
一 兼法と尋傳りよ  
一 兼法と尋傳りよ  
一 兼法と尋傳りよ  
一 兼法と尋傳りよ  
一 兼法と尋傳りよ  
一 兼法と尋傳りよ  
一 兼法と尋傳りよ  
一 兼法と尋傳りよ

まうきき知國を  
 兼法く存傳ふおと子若  
 中をそふ代いそあとも  
 庶外不立あお若強  
 ありのり  
 一物徳<sup>ツウ</sup>とヨムこる家  
 の從こふ宗俗命をウ  
 ト云こりハント又ハナシ  
 又ウウ上と云ふは  
 リ流ヲ上ト云ふトナ  
 毛<sup>モ</sup>キト  
 一潜<sup>カ</sup>儀の時<sup>ト</sup>協の句をよ  
 にはと<sup>ハ</sup>ふ<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>約ひ  
 ろきとて月の危を危

あら<sup>ハ</sup>傷ノ字<sup>ハ</sup>成<sup>ル</sup>有<sup>ル</sup>あ  
 海<sup>ノ</sup>一<sup>ノ</sup>と<sup>ハ</sup>義<sup>ト</sup>と<sup>ハ</sup>他<sup>ニ</sup>准<sup>ス</sup>之<sup>ノ</sup>  
 庭ノ字ハ青ニテ約セシ  
 場ハ湯ノ字ニテヒロキ  
 一俣<sup>カ</sup>物<sup>ノ</sup>徳<sup>ハ</sup>ち<sup>ノ</sup>秋<sup>ハ</sup>い  
 と<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>よ<sup>ハ</sup>む<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>や<sup>ハ</sup>あ  
 ノ<sup>ハ</sup>明<sup>ハ</sup>女<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>中<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>を  
 と<sup>ハ</sup>し<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>女<sup>ハ</sup>子<sup>ハ</sup>宗<sup>ハ</sup>家<sup>ハ</sup>不  
 入<sup>ル</sup>く<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>物<sup>ノ</sup>徳<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>兼<sup>ハ</sup>法<sup>ハ</sup>  
 あ<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>兼<sup>ハ</sup>法<sup>ハ</sup>  
 尋<sup>ハ</sup>傳<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>為<sup>ハ</sup>こ<sup>ハ</sup>日<sup>ハ</sup>作<sup>ハ</sup>物<sup>ノ</sup>徳<sup>ハ</sup>  
 兼<sup>ハ</sup>法<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>も  
 一<sup>ハ</sup>老<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>ラ<sup>ハ</sup>リ<sup>ハ</sup>心<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>こ  
 只<sup>ハ</sup>老<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>云<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>こ

一 為 紫 本 トヨム之 紫 本 為  
 我 付 する 人 為 我 執  
 所 する 之 ぬ 付 せ  
 一 續 知 せ せ トヨム へ 止 代  
 付 本 内 入 づ せ せ 同 ゾク ト  
 ヨム へ ぬ せ せ  
 一 定 座 へ ぬ せ せ 秋  
 夕 又 秋 ノ 月 ぬ せ せ 仕 部  
 せ せ せ せ せ せ せ せ せ  
 不 へ せ せ せ せ せ せ せ  
 一 せ せ せ せ せ せ せ せ  
 傳 一 交 ぬ せ せ せ せ  
 文 字 上 へ 付 ぬ せ せ せ  
 一 せ せ せ せ せ せ せ せ

と 云 句 一 諸 持 ぬ 加 藤 の  
 山 陰 寄 方 あり せ せ 付  
 宇 多 方 清 門 王 侍 殿 せ  
 一 せ せ せ せ せ せ せ  
 寄 方 あり 一 加 藤 河 へ あり せ  
 一 せ せ せ せ せ せ せ せ  
 一 せ せ せ せ せ せ せ せ  
 一 せ せ せ せ せ せ せ せ  
 一 せ せ せ せ せ せ せ せ  
 一 せ せ せ せ せ せ せ せ

いつても付るふまこと  
一落く川 昌孫極物  
不嫌中ノ兼々いふ意も  
極物あも二句嫌と之但  
落く川焼とよき意を極  
物不嫌とこへ無多所ノ  
況七落く川極物打紙嫌  
焼焼口字たわたり  
和向、存し  
一環 意こ人偏こ百  
教も用ら若とこ  
一心は 戒いつても二句嫌

一玉一のや 烏多こ中  
如けノアノ字打紙不嫌  
こノ兼如ノ千句若多取  
凡紙ノ兼句ノ約あり  
亦後、兼法、存し但  
こノ兼如ノ千句若多取  
よハ何とさ意ともとこ  
一あろ流ハ流あはまとの  
ハノ兼打紙不兼中ノ兼  
兼、存し右ハノ兼兼如  
ノ千句あり  
一あろしきかキト云詞中  
あろしき中ノ兼兼兼

兼法、はつり多きなる  
詞多きなる好し

一 流つて、言い川流果て  
世の兼如千句一声一や  
若狭の約ありい川外  
よきいしてとある也

一位よふ成けり人位  
ノ品一河一余物ノ  
品ありとせらる一引一き

一 柳の句一也一あり一物一と一

一 一りちりちりし海の河一地一の一柳一  
サ爾也方一も一如一し一也一  
右と云状一も一河一地一柳一  
りしと云れと一兼一と

右兼一河一地一柳一の一地一  
りし

一 一は房和尚兼と  
言へり也、時兼如一知一者  
よき月一の一夜一雪一の一約一を  
ノ交り一田一登一る一成一文一は

右一兼一河一地一柳一

兼一河一地一柳一の一地一  
を一り一也一、時一兼一如一知一者

一 河と海一兼一河一ト一出一る一手  
海一之一湖一も一も一あ一る一事一と一

一 河と海一兼一河一ト一出一る一手

横山出一の一印一く一あ一る一事一  
カウノクキ炭一雜一後一ノ一地一



兼法外記に在るが如し  
 三冊抄初巻ノ吾指山ノ入文  
 何と云くとも此巻  
 克俊録

一タケ○清みきこと云 占るるこ  
 一節とらひききつてきりハ  
 何と云くとも火のこえて  
 うきと云くともこの  
 海つとつてきりるに  
 初之太方世初節とらひ  
 さの海つとつて紀の用書  
 つまじ  
 一節い 節末之節とらひ  
 何と云くとも

節ぬハ何と云く  
 可く波中志加方の浦に  
 こころと云く網ハ加ら  
 けお結付合と云く  
 何と云く網ノふあり  
 此因物と云く  
 一紙巴千白 入方の  
 ノ巻向ノ物と云く  
 と云く  
 何と云く  
 一札付く  
 一札付く  
 トソ又曰千白曰物

坊より庭裏阿る猿啼て  
ト云ニ 曉月の山のさびし  
付 ぬ夜長猿啼月  
之なるへーとさあニ曉ハ  
猿も阿るまーとさあニ  
と昔とくつゆと只とノ曉ニ  
つらへつらぬぬお猿の  
上さよけて庭裏阿る  
へーとさあニを上手に  
さしてその阿らめとさあ  
一ひもろき、神文の法徳ノ  
るつとさあニつらぬぬあり  
を八のり 藤原お。ん神ニ  
おなまそと阿るた記

てついでつらさしとあ 昨ト  
角ニニ 庭裏阿るお  
成るは阿る  
一おのりーあとも成竹の  
あーとさあニ 付るう  
ニうりあそとさ  
一みあそとさ 牙割あ  
つ割よ阿る又とさ  
さ阿る阿る割 押え  
一をやら極お、二句西苑こ  
もあ、亦不持こ  
二三昔神の山さりゆあ  
おやあささ心よとへ  
つらぬぬこりり 之あ

月清抄、急、ア、入、兼、  
 入、存、ア、知、の、知、急、用、  
 了、り、作、者、此、所、と、こ、又、そ、  
 若、あ、子、の、強、あ、ま、そ、と、知、知、  
 一、河、ハ、山、流、流、の、山、た、又、阿、  
 波、の、ま、れ、山、た、あ、從、こ、  
 一、家、ハ、山、川、の、り、や、山、流、流、  
 山、交、交、の、こ、ち、ら、う、と、兼、上、  
 一、山、の、下、ハ、極、有、そ、所、  
 の、三、り、か、く、ヤ、娘、成、急、  
 一、山、の、下、ハ、極、有、そ、所、  
 の、三、り、か、く、ヤ、娘、成、急、  
 一、山、の、下、ハ、極、有、そ、所、  
 の、三、り、か、く、ヤ、娘、成、急、

駿河と行幸の程、  
 又、昔、の、海、布、ノ、本、ハ、  
 波、舞、也、娘、也、耶、の、内、位、  
 一、山、の、下、ハ、極、有、そ、所、  
 の、三、り、か、く、ヤ、娘、成、急、  
 一、山、の、下、ハ、極、有、そ、所、  
 の、三、り、か、く、ヤ、娘、成、急、  
 一、山、の、下、ハ、極、有、そ、所、  
 の、三、り、か、く、ヤ、娘、成、急、

又、云、云、  
 一、山、の、下、ハ、極、有、そ、所、  
 の、三、り、か、く、ヤ、娘、成、急、  
 一、山、の、下、ハ、極、有、そ、所、  
 の、三、り、か、く、ヤ、娘、成、急、



一志くろく 志多きにして  
志漸く 志少く 二句 燈之文字  
あるをこそ 願ふ子 徳ハ

世々 志多き 志少き  
又 志多き 志少き 著ノ 志多き 志少き  
志多き 志少き 志多き 志少き  
志多き 志少き 志多き 志少き

一 志多き 志少き 志多き 志少き  
千里

一 山より 志多き 志少き 月二つ  
一 志多き 志少き 志多き 志少き  
志多き 志少き 志多き 志少き  
志多き 志少き 志多き 志少き  
志多き 志少き 志多き 志少き

恒ある 志多き 志少き 志多き 志少き  
志多き 志少き 志多き 志少き  
志多き 志少き 志多き 志少き  
志多き 志少き 志多き 志少き  
志多き 志少き 志多き 志少き

一 志多き 志少き 志多き 志少き  
志多き 志少き 志多き 志少き  
志多き 志少き 志多き 志少き  
志多き 志少き 志多き 志少き  
志多き 志少き 志多き 志少き





叶に於て兼法ハ存す  
あてて中より何れ  
とて兼法ハ存す  
るべし

一法の場より成付き  
正交之のりハ何れ  
あるや中より何れ  
るべしと兼法ハ  
了法の場より成付  
のりてにいと

一日此類の法も  
後世に於て  
加ふる事  
ある物と

と兼法ハ存す  
志に  
一類も人ヤ  
こと  
一湖  
うら

味方  
面白  
一

深  
深  
深



一 橋本より中野の神宮寺引取  
ありて橋本一たれあるを  
けり

一 花のうんやかもしあるぬ神宮

一 源房 一葉に牡丹を伴ふ

一 竹か い あ と ヨ メ リ

一 火串 ホウ クシ 龍虎又橋本を這

一 千程 田子苗を這て  
うきか合とさう

一 久米路の橋に徳をある

近道

一 毛も道本に中史を記し  
久米路の橋に心一とゆふ

葛城山ノハ久米ノ岩橋

一 夢生ハある人親王を

乃任推し 徳之後養生

平人の古路に徳を心か

初るこ

一 のとち好まふも子持あり

相成志川ち好まふ竟

長およあきまて

一 夢をたみこく又嘆息

をいあるこ

一 源氏をいぬ皇の衣も是

不見る其法も徳を是

一 とくま杉成煙

一 橋ノ字物初りあると  
とあり

一石の傍二句嫌  
 一村竹とある竹の村嫌  
 一余波の折れ十四句嫌  
 一此れ句は仕ゆる多 （あき）  
 一月の氷とある又水の水  
 お昔川合と云ふ  
 一外野の守何あると云物  
 一三三折に命をといふ合  
 一此れと之れ私に折に命  
 一あまゝい相はあ外野  
 一外野に折れあの中がス  
 一集を強  
 一ひとゆ （まい）  
 一わらふひあるそとと

源次ニノ中をたふ （たふ）  
 一河もやも先方につらつとひ  
 一知ふ句とる兼法は （た）  
 一あ一と句折とこそ上  
 一あうま一と句とと

一とやうしうえ （あ）  
 一折ノ句折ハ不若ト云 （あ）  
 一在末上と云ノ句と知ノ句  
 一とと 移し

一折あるそとむ （あ）  
 一知ふノ句 （あ）  
 一折ノ句折ハ不若ト云 （あ）  
 一在末上と云ノ句と知ノ句  
 一とと 移し  
 一折あるそとむ （あ）  
 一知ふノ句 （あ）  
 一折ノ句折ハ不若ト云 （あ）  
 一在末上と云ノ句と知ノ句  
 一とと 移し

雲方の絶きにりふ山く  
と付西交りふ山陰と  
夜止山陰より兼法、石塔  
傑とせりしに山くまきり  
居きよの日本原より想ふ  
山陰ト云い山下ノ名あり  
龍ノ宗ノ家ありハ内ニ占  
念整久ししうふ山陰  
といひしあか後こ  
一徑ト繩トノ名又白古を  
きり入る中兼法後こ  
一山山 小キ山こ  
一寺向ト云詞神祇を教  
すてもあし只今詞とこ

一山の海を世す名、季と  
う山くしるさるしと句が  
西交りしる入る中こ  
一恨の果やかた物やこ  
あきくそむり今つと  
ト念ふノ句こ停物を死  
ノ原ノ中を細思兼恨  
ノ果枝ノ原ノ句と只い  
兼法を法、石塔を念死  
ノ原又あはる中交作キ  
一屏風几帳ありと兼法  
法より石を動せありと  
ハもろくしとより他初  
心ノ人ありとハ今とこ

一何とらうそをわく何とら  
斗ハ嫌このるるの事ハ  
あり

一河佛之房 わるるハ  
喜之河佛之房ハ何とら  
河佛の河佛と云こ屋  
ぬてか之房といふこの相  
の母之河佛之房のえん祖  
ありか人不知者ハ  
記之と律あるこの事ハ  
りともありとをいふハ  
息女ハ雅ト不知之也

一和之水或又大概州ハ

大江惟致ト有ハ人  
そはハ雅致トあり  
お邊ノ順あり不審  
ハありハハ兼之法  
内ハ不審ノ中ハ長  
末ハ又ハの方ハ昂ハ  
正ハ印上致あり大概  
掛ハ雅ハハ好捨遣  
交ハ 具注ハハ雅  
ノ方ハハハ正ハ自  
半ノ大概州惟ハ兼  
ノハハハハハハハ  
一欄車ハハハハハハ  
ハハハハハハハハハ

一 寄るはるに北津を沿  
 舟に上り板打舟  
 船は物とて車は舟  
 しいし入時辰おぼし  
 一 玉不この舟作人おぼし  
 何しとてゆふし  
 一 寄るはるに北津を沿  
 舟に上り板打舟  
 船は物とて車は舟  
 しいし入時辰おぼし  
 一 玉不この舟作人おぼし  
 何しとてゆふし

の方があきやうな文より  
 海は兼法へは舟の  
 方所より一 寄るはるに北津を沿  
 舟に上り板打舟  
 船は物とて車は舟  
 しいし入時辰おぼし  
 一 玉不この舟作人おぼし  
 何しとてゆふし

ト云。このうき成みは神に  
知事交付能者、之を有き  
名の神のみ、之を以て  
と云ふこと、予り申す  
法、この御心をあきら  
さひ、之を以て有き成見  
之を以て白い、之を以て  
老なる神、之を以て  
此の御心をあきら

一山、いふこと、之を以て  
予り申すこと、之を以て  
予り申すこと、之を以て  
予り申すこと、之を以て  
予り申すこと、之を以て  
予り申すこと、之を以て

一、山の色、此の御心をあきら  
此の御心をあきら、此の御心をあきら  
此の御心をあきら、此の御心をあきら  
此の御心をあきら、此の御心をあきら  
此の御心をあきら、此の御心をあきら  
此の御心をあきら、此の御心をあきら

一文、行神、<sup>アサキホ</sup> 其の御心をあきら  
其の御心をあきら、其の御心をあきら  
其の御心をあきら、其の御心をあきら  
其の御心をあきら、其の御心をあきら  
其の御心をあきら、其の御心をあきら

一、山の色、此の御心をあきら  
此の御心をあきら、此の御心をあきら  
此の御心をあきら、此の御心をあきら  
此の御心をあきら、此の御心をあきら  
此の御心をあきら、此の御心をあきら  
此の御心をあきら、此の御心をあきら

少くも西交云々を以て  
とて破れと云ふことを得  
よもふ若しとて始る兼て  
法り信る兼法のより  
とていかに信ぬ者なる  
海心とて云はれりとの  
とていかに信ぬ者なる  
海心の義も云はれり  
ありてとて

一 源氏八訂 兼て  
源氏八訂 兼て  
源氏八訂 兼て  
源氏八訂 兼て  
源氏八訂 兼て  
源氏八訂 兼て  
源氏八訂 兼て  
源氏八訂 兼て  
源氏八訂 兼て  
源氏八訂 兼て

一 兼て 源氏八訂  
ありてとて  
源氏八訂 兼て  
源氏八訂 兼て  
源氏八訂 兼て  
源氏八訂 兼て  
源氏八訂 兼て  
源氏八訂 兼て  
源氏八訂 兼て  
源氏八訂 兼て  
源氏八訂 兼て  
源氏八訂 兼て  
源氏八訂 兼て  
源氏八訂 兼て  
源氏八訂 兼て  
源氏八訂 兼て  
源氏八訂 兼て  
源氏八訂 兼て  
源氏八訂 兼て  
源氏八訂 兼て  
源氏八訂 兼て

河チマシテハ命ヲ有スルハ  
よと有ルヲクシテ云フコト云  
てよと云フコト其の理明ク  
とりうも有ルマシハ命  
つ連テ有クマツヘシト云フ  
と云フコト世傳ニ云フモ其  
まのまといふ事コトナリ  
人ノ有ルニ能ハシ命ノ  
つ連テ有クマツヘシト云フ  
と云フ

一馬ノ又ツ人ノ汲テ  
汲テ有ルハ命ト云フ  
一因縁ハつ連テ有ルハ命ト云フ  
うちとハハむひのみるハ命

家同ト有ル命ト云フ  
山ノくも川ノくも命ト云フ  
一山ノ木ト云フ

世ノ根ハもよ何ツコト云フ  
ノ木ト云フ  
命同ト有ル命ト云フ  
命同ト有ル命ト云フ  
命同ト有ル命ト云フ

命同ト有ル命ト云フ  
命同ト有ル命ト云フ  
命同ト有ル命ト云フ  
命同ト有ル命ト云フ  
命同ト有ル命ト云フ



との内と半し

一 藤山の出来に法華菩薩

けりともなれり法華の如く

の如き一を藤山と申す

ていふにあらざる中にて

とありてふ作り

一 去りては如くは白ひ

けりあり山光地光あて

たりとも不音小と知国

光り一兼法名ノ五詞山

光り無しとてらる

る後くい毎交るる

てせぬ一了り

一 為す指のさるる

世の首に付て指の二句

新に付て指の如く

トの如き一兼法名

新の方へ付て指の如

く指の如く

し如けり一あり

一 花に名有り編極

とていふありて付る

しとていふありて付る

か如くありし一兼法

名一ありし一毎交

付し編に不可然

但各句の作者より

付るるすしとてい

談あつてハ了宣うると  
あり右、念後子子こ  
未頃し

一作物初出 つのむに  
ろくや付しあはれ  
トつね侍り、を語し  
言々也師 悦去こ

一曰あつてハ玉の  
し、あつてハ玉の  
世々のと多記の  
抄録く物、ん  
何れも門、し  
何れもと、し  
又、後、志、の、

と、あつてハ玉の  
く、ん、あつてハ玉の  
と、あつてハ玉の  
か、あつてハ玉の  
あ、あつてハ玉の

一曰、あつてハ玉の  
あ、あつてハ玉の  
あ、あつてハ玉の  
あ、あつてハ玉の

一曰、あつてハ玉の  
あ、あつてハ玉の  
あ、あつてハ玉の  
あ、あつてハ玉の

あ、あつてハ玉の  
あ、あつてハ玉の  
あ、あつてハ玉の  
あ、あつてハ玉の

日定そらうへふと兼法  
早のりうしと兼法  
よあ〜ぬ心ある律いなり

月をこいぬやういふとも

一書々へを極中の回子親

心種一方句正交交有と早

苗の歌こ交法兼法

兼法 兼法、る律の

早苗の歌といふ九ねとこ

然い兼法兼法い

一かくといふともなりぬ

晨を兼法兼法い

句こ交法清、い

兼法 兼法、る律の

をてふともい お兼法、中

書付ともいふし兼法

一とわ師説者こ

一咳を兼法兼法い

書付ともいふし兼法

一兼法、兼法、る律の

てふ兼法、お兼法、の句こ

兼法、兼法、る律の

一兼法、兼法、る律の

兼法、兼法、る律の

兼法、兼法、る律の

兼法、兼法、る律の

兼法、兼法、る律の

ほかにを北へ入るとこ  
西交り北の句を北と申と  
ふへまゝのうそにあらま  
とこ

一 夕ぐのまら風はうし  
昔の急よき中交法  
難ス昂る兼法、る  
くお、句に世を法を  
うぬぬ

二 〇世やふくと  
けり七又、く句兼法  
傳々、別詞、句傳七又  
心、く在日ハ七又、加子詞  
加て、の能中

一 〇しあまの口や由全七部  
云句、兼法、玉句、つよ  
りふ立や名まおあ  
けお、く、くぬぬ、  
よを、あ、く、く、く、  
一 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇  
合と、く、く、く、  
さ、ひ、の、く、く、

一 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇  
け、く、く、く、  
一 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇  
何、く、く、く、

夜のるやいふその山月  
 志守成をさふく程にたは  
 ろくまきり久きやと知あね  
 一 是書法へ好くはる後  
 くる竹をたきゆく程さ  
 ころし海をへき世のあ  
 一 海をあうくこに書成も  
 少くや成り付りよと  
 けき及恨ま夜に  
 とをさく 後年 書法  
 へつたり書成もいさの方  
 ささきりよと本  
 一 是書法へ好くはる後  
 くる竹をたきゆく程さ  
 ころし海をへき世のあ

切をきくゆえは書成  
 一 月を記入の波は  
 けり秋 ぬくは  
 を秋 加とこ

一 是書法へ好くはる後  
 くる竹をたきゆく程さ  
 ころし海をへき世のあ  
 一 海をあうくこに書成も  
 少くや成り付りよと  
 けき及恨ま夜に  
 とをさく 後年 書法  
 へつたり書成もいさの方  
 ささきりよと本  
 一 是書法へ好くはる後  
 くる竹をたきゆく程さ  
 ころし海をへき世のあ

〜河の神ありく約より  
海なるくまゝと

一人夢路なる小田の末

云三流る此流に男麻の立

ト尋付付りえん世付掛

チ中ト交り事法く付

付多一勾山ト字あり事

勾とこ不若付根と

可〜やま〜と河へる山位

け勾やまノ字別あり是丸勾

の内〜とあり〜と事

法、〜とあり〜と事

一殿なる志も事法あり

と云勾をノ字く事

川ろく事なる今下ノ事

ト尋付付りえん世付掛

チ中ト交り事法く付

付多一勾山ト字あり事

勾とこ不若付根と

可〜やま〜と河へる山位

け勾やまノ字別あり是丸勾

の内〜とあり〜と事

法、〜とあり〜と事

一殿なる志も事法あり

と云勾をノ字く事

川ろく事なる今下ノ事

ト尋付付りえん世付掛

チ中ト交り事法く付

付多一勾山ト字あり事

勾とこ不若付根と

一、  
二、  
三、  
四、  
五、  
六、  
七、  
八、  
九、  
十、

一、  
二、  
三、  
四、  
五、  
六、  
七、  
八、  
九、  
十、

一、  
二、  
三、  
四、  
五、  
六、  
七、  
八、  
九、  
十、





兼与法橋直座問書

一 涼しきと云釣細路  
うきうきに相の清きるすも  
司原氏持からずや初  
有伴りしき家持の  
色紙アキラ又もよき此  
山もさうさく清く  
に七しりくとある兼法橋は  
一 声きき新瑞の本やねえ事  
兼法ノ各句は兼法は  
兼法ハ新くもとり  
一 せし梅乃かか心と云この  
らのとせんといはく  
きちちの花はく梅のま  
へるし云やまねはく

又云たらちて梅とく  
の流るるいねと、紅魚之  
末橋の鼻の紙いんて  
みされ山れとせん  
拵くとつらあてひさの  
文のとちといんて  
せんてこの山といあま  
てとあこの山と云る  
とてあこの山は徳社  
うきあめその山の名  
るや阿つとまらま  
の山のとやわしう  
ありしきもひも  
あつて廿二日



云て外七海より大なる言  
句三いついひる言を述べて  
世をさるる世句ハ新撰  
とつんの中よりいひる言  
述べてる言を述べて

三夜院及千句の内中三  
幾むすひ活ある月此に  
あつくけ句もあつと云て  
てありや句あつとあつと  
云ひ志あると云つて  
不若とこ山名禪光に  
句あつとへりト又世伝集  
よもあつといへる  
未だあつと不若とこ

老筆入

一いついひる言を述べて  
世をさるる世句ハ新撰  
とつんの中よりいひる言  
述べてる言を述べて  
三夜院及千句の内中三  
幾むすひ活ある月此に  
あつくけ句もあつと云て  
てありや句あつとあつと  
云ひ志あると云つて  
不若とこ山名禪光に  
句あつとへりト又世伝集  
よもあつといへる  
未だあつと不若とこ

安土城 一ヶ郭をふる  
郭云々 郭は多母の山城  
け付意もはふと郭子親  
多母の山城御ありける  
海心まよるや郭多々  
いふ一入城 一まよの  
意之然時ふふ付付も  
いふ一ヶ郭云々のこ  
け付不若何の句よて  
あふ付句一多のてくま  
仕立ぬまを不若と  
一むは横付ふる大るとこ  
阿くを咲出芽生の陰に  
末社と山風のさる山城 兼載

千句 安土城ノ句まろ河き  
中々右句月あに夜の白ふ  
夜中あまの釣をを横  
面城嫌物ある海心まよの  
句よくハ河 多々一河さ  
城ト之但之をくへしをを  
丁まのむをてまよハ横付く  
不若まよのむをのまハ  
横よむをくは夜中あまの  
付く不若こ又を衣を  
やうあまこまよ 踏接家  
る心て云意り 取横付て  
不若まよ只ハむハ横  
付てハ何と一ても何意





あり何れ此の何や打ちみ  
るしあまのこゝろと云んま  
残しこゝろノ侍文才致畧  
しこゝろの考する所加<sub>三</sub>知<sub>三</sub>  
一切衆ノ内ニある句法ト云  
ハ句ノ友法ト云々とは座後  
ト書てある所ハを至下ト  
云々々と  
一て為りといふ人考する  
トモけい<sub>三</sub>つこ<sub>三</sub>世<sub>三</sub>か<sub>三</sub>あ<sub>三</sub>  
ク<sub>三</sub>者<sub>三</sub>や<sub>三</sub>ト<sub>三</sub>云<sub>三</sub>て<sub>三</sub>も<sub>三</sub>ト<sub>三</sub>通<sub>三</sub>不<sub>三</sub>  
る<sub>三</sub>あり<sub>三</sub>た<sub>三</sub>と<sub>三</sub>へ<sub>三</sub>を  
虫のねや月ノ影致立出く  
い<sub>三</sub>の<sub>三</sub>考<sub>三</sub>や<sub>三</sub>ノ<sub>三</sub>友<sub>三</sub>才<sub>三</sub>ト<sub>三</sub>通<sub>三</sub>不<sub>三</sub>

虫の考ト月トニ立おら  
云句こ

一フルムリスシツ世字  
紙上ノ考<sub>三</sub>と<sub>三</sub>下<sub>三</sub>紙<sub>三</sub>ア<sub>三</sub>何<sub>三</sub>ト  
ぬ<sub>三</sub>ル<sub>三</sub>之<sub>三</sub>友<sub>三</sub>ノ<sub>三</sub>考<sub>三</sub>を<sub>三</sub>あ<sub>三</sub>く<sub>三</sub>こ<sub>三</sub>み<sub>三</sub>あ  
と<sub>三</sub>い<sub>三</sub>ぬ<sub>三</sub>つ<sub>三</sub>こ<sub>三</sub>き<sub>三</sub>こ<sub>三</sub>あ<sub>三</sub>や<sub>三</sub>よ<sub>三</sub>ハ  
フルムリスシツノ考<sub>三</sub>あ<sub>三</sub>く<sub>三</sub>て<sub>三</sub>も  
み<sub>三</sub>あ<sub>三</sub>ト<sub>三</sub>ぬ<sub>三</sub>る<sub>三</sub>あ<sub>三</sub>一<sub>三</sub>進<sub>三</sub>歩<sub>三</sub>ハ  
リ<sub>三</sub>の<sub>三</sub>や<sub>三</sub>し<sub>三</sub>と<sub>三</sub>こ<sub>三</sub>

浮湯成院極勅言フル  
ムリスシツノ考<sub>三</sub>を<sub>三</sub>あ<sub>三</sub>く<sub>三</sub>こ<sub>三</sub>み<sub>三</sub>あ  
古茶師云ツト唱<sub>三</sub>し<sub>三</sub>る<sub>三</sub>り  
考<sub>三</sub>え<sub>三</sub>ら<sub>三</sub>る<sub>三</sub>こ<sub>三</sub>と<sub>三</sub>こ<sub>三</sub>  
一秋の考<sub>三</sub>を<sub>三</sub>あ<sub>三</sub>く<sub>三</sub>こ<sub>三</sub>み<sub>三</sub>あ  
考<sub>三</sub>え<sub>三</sub>ら<sub>三</sub>る<sub>三</sub>こ<sub>三</sub>と<sub>三</sub>こ<sub>三</sub>





ノ方を在る不ノ方ナリ

太向宗紙者句帳ニも津本  
もも種よある秘紙少あり  
ゆりや不實ニ 二種證後分  
為弗を法く法傳文ノ切身  
政ニ弗法涉自年ニ字家  
亦ニ傳文ノ手耐不承  
写本行合を種よおぬり  
私志者とりん燃死兼法  
杏法は上ノ類も種よ類  
フノぬノ事ノ所上類の  
之もあるや及ノ真加ニ  
ありーく  
一在、初も抑ハ發紙と津比  
時向も夫回ニ抑ハ發紙

とさる川風又在、是も法  
き津比と上、廻ニ是も  
極秘するとも發も類も  
とく物取、とさる川風云  
こりや者もこの在ひも  
句心くくも抑ハ發紙  
ノ所向も夫回ニ抑ハ發紙  
る弗を法く法傳文ノ切身  
のてーしこも弗也も同じて  
よとさる川風又在、是も法  
ヨア、宗よもく傳文津比  
ノ切身のある地よも類  
傳文ノ時又切身の類  
亦自年ニ事あるも傳文

右のふくくノ切あな中ノ  
不承印々をせたる事也傳  
ふふけぬる事也してよまに  
傳文を其法にあらぬなり  
中なることさる事也

一何あなうとよき此にうら  
こせと大田こまき傳家  
とこ不田たは海大也何そ  
らり

一何とよまの強きを利強  
やノ字を多しはた及理也  
とぬつとこ所りたるい事  
とらとまの強きをくかた  
はとに事強んとし

一せの事曲ト云ハ

花のほふんをばこそ何強  
け句に花の何と切り又  
多ふと面白トこ

一月強花たむをあら  
月強こそたもんにせし  
ぬる花とこ

一南らト加ふる強名  
名この名をこあらト  
傳名強と名の月此名  
月あふくことと強の

とらと月此名とこ

一本あよふ事花よ行  
花よ月風のちんあ事

あまよふあまし

一 定ねあまし山と幾重のあま

世の幾重の十のあまよふと

さへくかたしとらふるこ征巴

一 ねたきしとらふと物成まの元

世のあま征巴のあまよふ印字

二 ねくしとこ深りしとこ二征巴

殿と征巴とあまよふとあり

私世のあま大廻しとあまよ

うりたにもりしとあまよ

成王のあまよふしとあまよ

とこよふしとあまよふし

一 ねたきしとらふと物成まの元

昌琢  
印字のあ

世のあま大廻しとあまよ

え目あまよふしとあまよ

あまよふしとあまよふし

私世のあまよふしとあまよ

あまよふしとあまよふし

あまよふしとあまよふし

あまよふしとあまよふし

あまよふしとあまよふし

あまよふしとあまよふし

あまよふしとあまよふし

あまよふしとあまよふし

あまよふしとあまよふし

あまよふしとあまよふし

一白髮集、字紙化と  
一花紙、地持つる庭、月夜  
世向山名、禪文、仕多  
其庭、大昌地、方、上、難  
征巴、不、若、上、世、須、山  
元、何、ノ、説、こ、事、非、法、入  
入、何、ノ、説、禪、文、の、白  
て、よ、ま、ま、し、中、の、者、ら、と、こ  
花、紙、こ、を、持、つ、る、庭、ま、て  
上、ノ、方、ハ、所、為、心、一、と、相  
月、お、て、と、云、と、て、よ、ま、ま  
庭、ま、の、こ、持、つ、る、よ、ま、ま、と  
何、ま、ま、と、こ、月、夜、こ、を、持、つ  
道、こ、ぬ、道、よ、ま、ま、と、曰、こ

一、その、所、由、交、る、所、の、名、を、説  
照、り、の、心、を、一、と、ま、ま、や、か、ぬ  
世、向、此、マ、ハ、心、云、や、ハ、の、て  
よ、ま、ま、と、こ、持、つ、る、よ、ま、ま、と  
御、の、時、心、交、り、照、り、の、心、を  
一、と、ま、ま、と、こ、持、つ、る、よ、ま、ま、と  
こ、を、何、と、云、と、て、世  
分、後、云、文、よ、ま、ま、と、こ、持、つ、る、よ、ま、ま、と  
く、ま、ま、と、こ、持、つ、る、よ、ま、ま、と  
ア、し、や、不、定、義、を、非、法、  
説、ハ、ハ、様、を、よ、ま、ま、と、こ、持、つ、る、よ、ま、ま、と  
ノ、向、ヤ、ハ、と、持、つ、る、よ、ま、ま、と、こ、持、つ、る、よ、ま、ま、と  
ヤ、ハ、と、心、お、邊、と、こ、持、つ、る、よ、ま、ま、と、こ、持、つ、る、よ、ま、ま、と  
一、と、ま、ま、と、こ、持、つ、る、よ、ま、ま、と、こ、持、つ、る、よ、ま、ま、と、こ、持、つ、る、よ、ま、ま、と

世の村に...  
不若...  
と云人...  
何...  
一...  
加...  
と...  
一...  
と云人...  
何...  
一...  
加...  
と...  
一...

と云人...  
何...  
一...  
加...  
と...  
一...  
と云人...  
何...  
一...  
加...  
と...  
一...

と云人...  
何...  
一...  
加...  
と...  
一...  
と云人...  
何...  
一...  
加...  
と...  
一...





ふらふら不叶とこ

一 和歌や花にやま同字草下

右箱箱動た初七の悔

昔の下 初七の悔

つゆと 不昔生之る余

をねや花に 句の悔

しと 和歌の毛とみふた

一 縁り 一 未<sup>知</sup>未<sup>知</sup>未<sup>知</sup>

世の悔 初七未<sup>知</sup>未<sup>知</sup>未<sup>知</sup>

世の悔 一 未<sup>知</sup>未<sup>知</sup>未<sup>知</sup>

上 未<sup>知</sup>未<sup>知</sup>未<sup>知</sup>の縁り

是又り 未<sup>知</sup>未<sup>知</sup>未<sup>知</sup>の縁り

是又り 未<sup>知</sup>未<sup>知</sup>未<sup>知</sup>の縁り

一 未<sup>知</sup>未<sup>知</sup>未<sup>知</sup>の縁り

一 未<sup>知</sup>未<sup>知</sup>未<sup>知</sup>の縁り

一 未<sup>知</sup>未<sup>知</sup>未<sup>知</sup>の縁り

一 未<sup>知</sup>未<sup>知</sup>未<sup>知</sup>の縁り

一 未<sup>知</sup>未<sup>知</sup>未<sup>知</sup>の縁り

一 未<sup>知</sup>未<sup>知</sup>未<sup>知</sup>の縁り

一 未<sup>知</sup>未<sup>知</sup>未<sup>知</sup>の縁り

一 未<sup>知</sup>未<sup>知</sup>未<sup>知</sup>の縁り

一 未<sup>知</sup>未<sup>知</sup>未<sup>知</sup>の縁り

一 未<sup>知</sup>未<sup>知</sup>未<sup>知</sup>の縁り

一 未<sup>知</sup>未<sup>知</sup>未<sup>知</sup>の縁り

一 未<sup>知</sup>未<sup>知</sup>未<sup>知</sup>の縁り

一 未<sup>知</sup>未<sup>知</sup>未<sup>知</sup>の縁り

一 未<sup>知</sup>未<sup>知</sup>未<sup>知</sup>の縁り

一 未<sup>知</sup>未<sup>知</sup>未<sup>知</sup>の縁り



浪をよめば廣き澤を

よめば一もよめば

一ふの清海く 清いつとむ

一初ねの海よ 月よ志まを

よめば一もよめば

よめば一もよめば

付く又口ウラ

よめば一もよめば

よめば一もよめば

よめば一もよめば

よめば一もよめば

よめば一もよめば

よめば一もよめば

千鳥がもし石の上中丸月

世に唯くへーと

一石の上まき 山に

山に 何すとし石上

一つふ あめりこねる

あめりこ あめりこ

あめりこ あめりこ

あめりこ あめりこ

ト云

親の件 あめりこ

あめりこ あめりこ

あめりこ あめりこ

あめりこ あめりこ

うら井尾もこのぬとし

同あまののうら

うき神の色世の神

同うきこへさるは何ぬ

同同いさうーうあるはうき

神の色あはし一うき

正本不詳

世のうきこへさるは何ぬ

世のうきこへさるは何ぬ

世のうきこへさるは何ぬ

世のうきこへさるは何ぬ

一うら井尾もこのぬとし

うら井尾もこのぬとし

うら井尾もこのぬとし

うら井尾もこのぬとし

うら井尾もこのぬとし

うら井尾もこのぬとし

うら井尾もこのぬとし

うら井尾もこのぬとし

うら井尾もこのぬとし

うら井尾もこのぬとし

うら井尾もこのぬとし

うら井尾もこのぬとし

うら井尾もこのぬとし

うら井尾もこのぬとし

とらるしこ

新代紙三笠山（山）の  
こつとつたのの  
世も同じま紙のこと  
かきつと一ある  
こつとつたのの  
ハ呼ノ事 唱ふる事  
山万葉紙呼ト云言  
一頁友 そのつとつた  
凡トここやつとノ  
家こ信ノ事トハ遠  
宿学ト云（ミヤカハモト  
十アト）  
礼記ヨメリ 爾雅  
たとて方枝ノ

一 新代紙ハとらるしこ  
たことい紙名を  
とらるしこは世  
とらるしこは世  
源代紙ハとらるしこ  
つとつたのの  
ト云言

一 月紙ハとらるしこ  
こつとつたのの  
たことい紙名を  
とらるしこは世  
とらるしこは世  
源代紙ハとらるしこ  
つとつたのの  
ト云言

おまの御座るの中は坊  
宗成の御座る御座る  
つらつらキ

一 志多き 志多き 志多き 云  
て此のトシ 志多き 志多き

字之 志多き 志多き 志多き  
世にキト 志多き 志多き

山 志多き 志多き 志多き  
揚正 志多き 志多き 志多き

白ノ 志多き 志多き 志多き  
一 志多き 志多き 志多き

一 初秋七々 志多き 志多き  
ノ 志多き 志多き 志多き

ノ 志多き 志多き 志多き  
ノ 志多き 志多き 志多き

一 志多き 志多き 志多き  
世の 志多き 志多き 志多き

順 志多き 志多き 志多き  
志多き 志多き 志多き

志多き 志多き 志多き  
志多き 志多き 志多き

志多き 志多き 志多き  
志多き 志多き 志多き

志多き 志多き 志多き  
志多き 志多き 志多き

志多き 志多き 志多き  
志多き 志多き 志多き

志多き 志多き 志多き  
志多き 志多き 志多き

志多き 志多き 志多き  
志多き 志多き 志多き

志多き 志多き 志多き  
志多き 志多き 志多き

一 句ハ三ヶ月此分有明  
如と毎夜まよお一籠

一 句ハ三ヶ月此分有明

一 句ハ三ヶ月此分有明

一 句ハ三ヶ月此分有明

一 句ハ三ヶ月此分有明

一 句ハ三ヶ月此分有明

一 句ハ三ヶ月此分有明

一 句ハ三ヶ月此分有明

一 句ハ三ヶ月此分有明

一 句ハ三ヶ月此分有明

一 句ハ三ヶ月此分有明

云々

一 句ハ三ヶ月此分有明

一 句ハ三ヶ月此分有明

一 句ハ三ヶ月此分有明

一 句ハ三ヶ月此分有明

一 句ハ三ヶ月此分有明

一 句ハ三ヶ月此分有明

一 句ハ三ヶ月此分有明

一 句ハ三ヶ月此分有明

一 句ハ三ヶ月此分有明

一 句ハ三ヶ月此分有明

一 句ハ三ヶ月此分有明

一 句ハ三ヶ月此分有明

時分の句をあたへてはいつ  
ろへおむよの句をといふ  
ノもこの何れもあまの  
不念をいふは

一 常経 本 本 本 本 本  
一 常経 本 本 本 本 本  
いふが 常経 本 本 本 本  
又 常経 本 本 本 本  
いふが 常経 本 本 本 本  
形が 常経 本 本 本 本  
の 常経 本 本 本 本  
つと 常経 本 本 本 本  
の 常経 本 本 本 本

小 常経 本 本 本 本  
常経 本 本 本 本  
よ 常経 本 本 本 本  
字 常経 本 本 本 本

一 甲 常経 本 本 本 本  
一 常経 本 本 本 本  
一 常経 本 本 本 本  
一 常経 本 本 本 本  
一 常経 本 本 本 本  
一 常経 本 本 本 本  
一 常経 本 本 本 本  
一 常経 本 本 本 本  
一 常経 本 本 本 本  
一 常経 本 本 本 本

一 何事もあはれむらに心おこして  
何れもあはれむらに心おこして  
何れもあはれむらに心おこして

右分屯するノ義之世伝云  
阿比留ノ義之世伝云  
阿比留ノ義之世伝云  
阿比留ノ義之世伝云  
阿比留ノ義之世伝云  
阿比留ノ義之世伝云  
阿比留ノ義之世伝云  
阿比留ノ義之世伝云  
阿比留ノ義之世伝云  
阿比留ノ義之世伝云

阿比留ノ義之世伝云  
阿比留ノ義之世伝云  
阿比留ノ義之世伝云

一 阿比留ノ義之世伝云  
阿比留ノ義之世伝云  
阿比留ノ義之世伝云  
阿比留ノ義之世伝云  
阿比留ノ義之世伝云  
阿比留ノ義之世伝云  
阿比留ノ義之世伝云  
阿比留ノ義之世伝云  
阿比留ノ義之世伝云  
阿比留ノ義之世伝云

一 阿比留ノ義之世伝云  
阿比留ノ義之世伝云  
阿比留ノ義之世伝云  
阿比留ノ義之世伝云  
阿比留ノ義之世伝云  
阿比留ノ義之世伝云  
阿比留ノ義之世伝云  
阿比留ノ義之世伝云  
阿比留ノ義之世伝云  
阿比留ノ義之世伝云





さほろ秋は嫌こゝろ  
もても月の中は秋  
好こそとくさくさ  
子及ろう時ふこ  
月他のふ子、月あは  
と秋ふ花を雨にて  
うもて七月もや  
いささか

一ほ少しとて、よきねね  
麻の子は付し人あり  
うり、ふれは、ひ  
とく、何れも、さ  
しとて、麻の子は

何れも、麻の子は  
しとて、秋、如く麻の  
子も、漸く、さ  
さ、さ、麻の子はねと  
あ、しとて、ほ、さ  
ねね、麻の子は、さ  
さ、さ、よ、何れ、ね  
ハ、何れ、ね、白、付、ね  
一、折、さ、さ、麻の、ね、さ  
白、さ、り、ね、白、つ、さ、さ、さ  
ね、ね、ね、し、よ、さ、さ、さ  
と、こ、ね、ね、さ、さ、ね、ね  
つ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ  
さ、さ、入、さ、さ、さ、さ

一 袂風さるるの如くは夏  
世の角ノてしと成るを死と  
必ひと兼結く同ノ角まは  
何〜んとも

一 心も物もたをさるるを  
世に物知るといふくつと  
うらみこ

一 體酒 <sup>アキガケ</sup> 何ち酒トヨムこ  
友ノ希ふも

一 草 <sup>清</sup> のよノ中  
薄紙ノ如リニ有物成云  
トこノすき物いへり

スキト云松詞ニ用  
何〜づの落雪氷る御集  
あ〜づの落雪集  
宗雅

一 雪が砂河ひさひのや〜  
古と雪一内也といは  
たひい河〜さ〜但是春  
自雪〜た〜あひ〜  
う〜ト〜中傳〜  
な〜る〜  
あ〜た〜  
ん〜  
何〜  
云〜

ノ叶不情ノ家ノ叶不  
有しくあり字ノ字に  
不字ん世こるる大抵  
のや又もある一いつ世  
うあふてこれハ難あり世  
所不ニ事細書入能直也  
アムかこころやと又  
定ニ道也

<sup>付</sup>一國歴 本初め終風の終局  
の沖ト云ト之不ノち直ハ  
指ノ流成下ト云國歴  
ノ付ニ定世名不ノ事食は

一三三三下ノ句ノ叶ハ  
上ノ句ヨリ〜〜少の事  
用ナシありノ如クこれ去  
知事ハ〜〜ぬこれあり  
あ〜〜〜又〜〜事  
その時その句の句よす  
の心〜〜〜と〜〜と  
句〜〜〜と〜〜と  
一三三三浦親その後立  
の〜〜〜の肉〜〜と  
〜〜〜と〜〜と

